7を70倍する以上の赦し

マタイ18章21～35節
2022年2月27日
松田 基子 師

今週の水曜日、3月2日は、灰の水曜日です。今年も受難節に入ります。 イエス様が人類の罪を贖い、人類に天の国への門が開かれるために、その贖い代として、神の御子の値を差し出し、十字架に架かられるのです。 神様も御子イエス様も、人間の為に、なぜそれ程までの事をされたのでしょうか。 聖書はその事を、

『**神様の愛**』

と言っています。

ヨハネ第Ｉの手紙、4章9節、10節には、

「**神は、独り子を世にお遣わしになりました。その方によって、わたしたちが生きるようになるためです。 ここに、神の愛がわたしたちの内に示されました。 わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。 ここに愛があります**」

と記されています。 この様に、愛とは説明ではなくて実体です。 神様はご自身の愛を現す実体として、御子イエス・キリストを人類にお与えになりました。 そのイエス様は、全人類の罪を負って、その罪を償い、贖うために、十字架にお架かりになったのですが、イエス様はそこで、何と祈られたでしょうか。

ルカ福音書の、23章34節で、イエス様は、ご自身を十字架につけた人々のために、それは、全人類のためでもありましたが、

「**父よ、彼らをお赦しください。 自分が何をしているのか知らないのです**」

と祈られました。 イエス様の十字架は、神様に対して、人類の罪が赦されるためのものでありました。 神様の御性質である愛の最大のもの、それは、**人類への赦し**です。 ところが、ここで考えなければならないことは、

『人間は、神様から、どれだけの赦しを受けたかと言う事が、当の人間自身には、分からない』

と言うことです。 むしろ、**分かろうとしない**と言うことです。

いったい、私たちは、神様が、御子イエス・キリストを十字架に架けることまでしなければ、赦され得なかった**自分の罪**、**人類の罪**について、**どのくらい自覚して**いるでしょうか。 イエス様の十字架の贖いに対して、**どれくらい感謝して**いるでしょうか。

さて、イエス様は、十字架に向かわれるに先立って、弟子たちに、その神様の赦しの愛の、大きさを教えられました。 話しの発端は、マタイ18章21節で、ペトロが、イエス様のところに来て言いました。

「**主よ、兄弟がわたしに対して罪を犯したなら、何回赦すべきでしょうか。 7回までですか**」

と尋ねています。 ペトロはイエス様が、マタイ、18章15節で、

「**兄弟があなたに対して罪を犯したなら、行って、2人だけのところで忠告しなさい。 言うことを聞き入れたら、兄弟を得たことになる**」

と勧められたことから、

『では、一体何回赦せば、よいのだろうか』

との疑問を持ったようです。

ペトロにしてみれば、ユダヤ教では、3度まで赦す様に教えられてきましたが、イエス様は、ご自身の許に来る人々が悔い改める時、何時も赦しておられました。 その事を考えると、

『普通の人間の我慢の限度を超えて、完全数の7回までも赦す事が、自分の限界ではないだろうか』

と、彼は考えた様です。 そこで、ペトロは、

『兄弟の赦しは、7回までですか』

と尋ねたのでしょう。 ところが、イエス様は、18章22節で、

「**あなたに言っておく、7回どころか7の70倍**

までも赦しなさい」
とお答えになりました。 7の70倍は、490回です。 勿論これは490回まで、数えて赦しなさいと言う意味ではありません。 岩波訳には、
「**無限という意味**」
だと記されています。 赦しというのは、
『相手のした悪事に対して、相手を罰したり、恨んだり、償いを求めたりしないで、咎ある行いを放棄すること』
であると説明されています。

しかし、生来の人間は、その様な心を持っては居ないと言うことが、創世記の4章23節、24節に記されています。
「**レメクは妻にいった。**
『アダとツィラよ、わが声を聞け。 レメクの妻たちよ、わが言葉に耳を傾けよ。 わたしは傷の報いに男を殺し、打ち傷の報いに若者を殺す。 カインのための復讐が7倍なら、レメクのためには77倍』」
とあります。

この様に、生来の人間の心は、やられたらやり返す。 それも、
『目には目を、歯には歯を』
では、治まり切れないで、
『受けた以上の痛みを相手に与えなくては、自分の気持ちが治まらない』
と言う罪の性質を抱えています。 イエス様は人間のその様な心の底に巣くう、罪の全てを引き受けて、十字架に架かって下さるのです。
7を70倍するまで、つまり、無限に赦すことは、イエス様にしか出来ない事ですが、イエス様は、弟子たちも、ご自身の後に従って来ることを願っておられました。 それは、人間には出来ない事ですが、神様の力が、それを可能にして下さるのです。

しかし、そのためには、神様に、自分が、どれ程の赦しを受けているか、それを真底、知らなければ、他者への赦しは生まれて来ません。
そこで、イエス様は、1つの喩え話によって、その事を教えられました。 23節に、
「**天の国は次のようにたとえられる。**
ある王が、家来たちに貸した金の決済をしようとした」
とあります。 天の国、そこは神様の御支配であり、神様の赦し無しには入れない、罪の無い世界です。 神様は天の国への入国者をどう判断なさるのでしょうか。

喩え話では、神様は王様に喩えられています。
王様は全国民の支配者であり、国民を守って居る事などから、税金を徴収します。
その税を集める方法として、領土を州に分け、その徴収責任を、高官の家来である、州知事に任せています。 州知事は、集めた税金を年毎に、きちんと王様に納めなければ成りません。
ここに登場する王様の家来というのは、王様への莫大な借金が有ることから、この様な王様のお金である、税を握っていた家来が想定されると言われています。 州知事であろう家来は、自分の許に入って来る多額なお金に、心が迷い、それを自分の楽しみの為に、自分勝手に、使い込んでいました。

国には、
『不作で税金が集まらない』 とか、
色々と言い逃れをして、引き延ばしていました。
ところが、王様自らが、長年にわたる、不良の貸し金の取り立てをすることになったのです。
長年、私欲のために、王様のお金である税金を流用して来た家来も、遂に王様の前に呼び出されて、決済を迫られることになりました。
何と彼の横領金額は、1万タラントンです。
1タラントンと言っても、それは、6千デナリオンで、1デナリオンは、労働者の1日の賃金です。

仮に、1日5千円の賃金で計算しても、
1タラントンは、3千万円です。 その1万倍ですから、3千億円にもなります。 そんな途方もない金額を使い込んだ家来は、どんなに手を尽くし

ても、返済出来る可能性はありません。 そこで、王様は、彼に厳しく言いました。

「**自分も妻も子も持ち物も全部**
売って返済するように」

と、命じました。 当時の社会では、借金が返せない場合は、自分も妻子も、奴隷に売って返済しなければなりませんでした。 王の言葉は尤もな命令でした。 ところがこの家来は、以前から言い逃れの名人で、王様の前に平伏して、

「**どうか待ってください。**
きっと全部お返しします」

と、返済は、不可能であるにも拘わらず、助かりたい一心で、懇願しました。

この世の王であれば、家来のこの悪行を、徹底的に調べさせて、その上で、厳罰に処するように命じたことでしょう。 ところがこの王様は、家来の言葉を信じて、彼に深い同情を寄せ、

『憐れに思い、借金を帳消しにする』

と言って、決済は終わったのです。 家来は天にも登る気持で、喜びに満たされました。 家来は、考えても見なかった展開に有頂天になって、王様の前から退出してきました。

『家族に早く、この事を知らせなければ』

と、外に出て見ますと、彼はそこで見知った顔に、出会ったのです。 その人は、この家来の仲間で、彼に、百デナリオンのお金を貸していました。

家来は、

『これは、良い所で出会った』

と、彼を捕まえ、首を絞め、

「借金を返せと」

と、迫りました。 仲間は平伏して

「どうか待ってくれ。 返すから」

と、頻りに頼みました。 その姿は、今し方、王の前で必死な思いで、憐れみを乞うた、自分の姿ではありませんか。 自分の王様に対する借金の額に比べれば、それは比較にならない小さなものです。 返済できない額ではありません。 待ってやれば、返して貰える額です。 しかし、この家来は、

『たった今、王様から途方もなく返済不可能な借金を赦されたことは、無かったかのように、情け容赦なく』

仲間の懇願に承知せず、その仲間を引っ張って行き、借金を返すまでと、牢に入れたのです。

何と言う身勝手な、自己中心な人間なのでしょう。 別の仲間たちが、この悪い仲間のやり方を見ていました。 彼らは牢に入れられた仲間の事で、非常に心を痛め、王様のところに行って、一連の非道な行為を、全て報告しました。 すると、王様は、32節に記されていますように、

「**主君はその家来を呼びつけて言った。**
『不届きな家来だ。 お前が頼んだから、
借金全部を帳消しにしてやったのだ。
わたしがお前を憐れんでやったように、
お前も自分の仲間を憐れんでやるべき
ではなかったか』」

と叱責しました。 最早弁解の余地はありません。 王は不届きな家来に、彼が仲間に対して取ったと同じ仕方で、

「**借金をすっかり返済するまで**」

といって、この家来を、牢役人に引き渡したのでした。

実はこの、不届きな家来は、**私達の姿**です。 神様は、王様に喩えられています。 神様は、わたしたちに、お金では買うことの出来ない、全世界より尊い、神様の命の息が吹き込まれた、人間の尊厳と、命を与えて、この世に送り出して下さいました。 神様にとって、掛け替えの無い存在とされました。 ですから、私達は、お金では買うことの出来ない、命と人生を、神様から借りて、預かって、この世を旅している者です。 それなのに、

『私の命、わたしの人生、』

だと思い込んで、神様に聞き従うことをせず、自己中心に生きている者です。 神様からの借り物である、命と人生を罪に汚し、浪費してしまっているのです。 限りなく聖く、正しくあら

れる神様の、天の国に入ることなど、全く不可能なことです。

ところが、命の与え主であられる神様は、ご自身に背いた人間を尚も愛し、惜しんで、人類の罪の負債を払う方法をお考えになったのです。 その、たった一つの方法が、全人類の価値に勝る、神の子の値で、人類の罪を償い、贖うことでした。 そのために、神の御子はこの世に生まれて来られ、人類の罪を贖う為に、神の子の値を差し出して、十字架に架からなければならなかったのです。

神様は、イエス・キリストによって、罪の赦しを与える証明に、イエス様を十字架の死から、3日目に復活させられました。 イエス様は復活して、ご自身を信じる者に、永遠の命を与えられました。 神様は、私達がどんなに努力をしても、命を献げても得る事の出来ない、罪の借金を、帳消しにしてくださったばかりか、人間の力では決して、手に入れることの出来ない、天の国に入ることが出来る、高価な神の子の身分まで、くださったのです。 それは、唯々ひとえに、神様の愛による赦しが与えられた結果でした。

私達は、イエス・キリストを信じた時、それ程の宝を得たのです。 しかし、私達は、その真の価値に、本当は、気付いていません。打ち砕かれてはいないのです。 なぜなら、私達は、神様から、それ程大きな愛の赦しを頂いていながら、隣人の百デナリオンの、自分に対する不当を、赦すことが出来ないで、相手を拒否したり、憎んだり、恨んだりして、心を赦さないでいるのです。 イエス様は、
『その様な心が、神の国を閉ざして行く』事を案じられました。

そこで、18章35節に、
「**あなた方の一人一人が、心から兄弟を赦さないなら、私の天の父もあなたがたに同じようになさるであろう**」
との、警告をお与えになりました。 私達自身には、人を赦す力はありません。 ただ、自分自身の**罪の重さを知り**、イエス様が、十字架で流してくださった**血潮の愛**が、**心に迫る**時に**のみ**、隣人の罪を**赦すことが出来**ます。 イエス様の十字架は、わたしたちの存在を永遠の滅びへ引きずり込んでいく、私の罪が赦されるためでした。

3月2日から、受難節に入ります。 イエス様の十字架への道行が始まります。 神様から、イエス様から、7度を70倍する以上に、赦され続けている私達です。 その愛を更に深く知る事が出来るように、聖霊の助けと導きを祈り求めましょう。 そして、その神様の愛、イエス様の愛の赦しに応えて、互いに赦し合い、愛し合い、神の国を映し出す交わりを求めてまいりましょう。

お祈りを致します。
憐れみ深い天の父なる神様

御子イエス・キリストが、身代わりとなって、十字架に架からなければ償い得なかった、罪深い私達を見捨てず、キリストの御救いに招いて下さり、心から感謝します。

イエス様を信じる私達を、咎め立てもせず、天の国に迎えて下さる、この大きな憐れみと愛に感謝致します。

この御愛を、真底、知る者と成らせてください。その愛で、隣人を愛し、また赦し、互いに、命の道を歩む者をならせてください。

尊い救い主イエス・キリストのお名前によってお祈りを致します。
アーメン。